

虎關宛詞

福島俊翁

東福寺の虎關師鍊はど内外の典籍を讀破してゐる禪僧は古今に稀であらう。當時虎關と相識り、唯一人の話相手として許され「殊に見愛の寵を荷ふこと儕輩に過ぎたり」と自ら悦んだ所の中岩圓月が虎關和尚に與へた手翰の中に

座下は聖域に微達し、古人に度越す。強記精知にして且著述に富む。凡そ吾西方の經籍五千餘軸、其の奥を究め達せずといふことなきは、之を置いて論するなし。其餘、上は虞夏商周よりして、下は漢魏唐宋に逮ぶまで、乃ち其の典謨誥訓矢命の書を究め、其の風賦比興雅頌の詩に通じ、一字の褒貶を以て、百王の通典を考ふ。六爻貞悔に就いて三歳の玄根に參る。明堂の説、封禪の儀、風を移し俗を易ふるの樂、應答接問の論、以て子思、孟軻、荀卿、楊雄、王通の編に至り、旁ら老列莊騷班固范曄太史の紀傳、三國及び南北八代の史、隋唐より以降、五代趙宋の紀傳乃ちまた曹謝李杜韓柳歐陽三蘇司馬光黃陳晁張江西の宗、伊洛の學に入つて、轆轤經緯、旁据牛援、奇を吐き、陳を去つて、曲折宛轉す。座下は斯文に於て古に羞ぢずと謂ふべし(原漢文)

と言つてゐるのも過稱ではないのであつて、虎關の濟北集に眼を濺いだものには、一々肯づけるのである。否寧ろこの經史子集四部の書だけに留まらず、本邦の史籍に於ても十分の検討を敢てしてゐることは申す迄もないことである。かくの如く虎關が博覽の人であつた事や藝文に堪能であつた事迹が後人の追隨を許さない點が多いと言ふばかりでなく、虎關には師獨自の高い見識があつたことに注意せなければならぬのである。其の史觀に於ては我が國體の世界に無双な尊嚴さを持つことや、當時一般の禪僧達によつて玩弄された朱子學に對してすら嚴正な批判を下して無條件に之を取り入れてゐない學的態度の如きは、吾人の常に推服する所である。

然るに好事魔多しとやら、虎關の態度に大いに慊らぬ意見を敢てして之を非難する人々も無いではない。吾人の寡聞を以てしても先づ林羅山、空華諦忍等の如きがあるのである。

羅山文集の中に「元享釋書辨」といふ二篇があるが之を讀むと、羅山(天正十一年二二四三生
明曆三年二三一七死)は初に元享釋書三十卷は、其の立傳は史記に則り、其の贊論を著すや班馬に則り、其の分類して首の傳智、次の慧解、淨禪等の類は序卦に則り、其の度摠論は繫辭に則り、其の資治表は春秋に則り其の凡例は左公穀に則り、其の志は兩漢書に則る。寔に本朝僧史の權輿か(原漢文)

と述べ、其の組織が一々據る所のあることを指摘してゐる迄はよいとして、更に、羅山は

吁、我が道、何爲れぞ人の此の如き無きや。師鍊は庶幾するに足らず。黃勉齋云ふことあり。

虚靈の識を守つて、天理の眞に味しと。儒者の言を借りて以て佛氏の説を文る者に師鍊あり。之をして此の如からしめしは何ぞや。我が道の人無きが故也。若し虎關をして門に孔氏に及ばしむれば則ち殆ど庶幾からんか。或ひと曰く、豈惟々虎關のみならんや。大藏經五百餘函の文は皆是れ我が文字を以て之を借るのみ。豈惟々虎關のみならんやと。林子曰く、愈り。師鍊の我が書に於ける猶盜の主人に於けるがごとき也。剽掠僭竊を工となすのみと。

評してこゝまで來ると正にその應答に苦しまざるを得ない。漢文字、漢文章は儒者の專用に屬するが故に他門の者は之を用ふるを憚らねばならぬといふ如きは非常な偏見としか思はれない。元來林羅山は徳川初期文教勃興の機運に際會して、學問の普及に努力し、本邦朱子學の基礎を築いた博覽多識の大儒には違ないが、その少年時代は建仁寺大統院の慈稽和尚から句讀を受けた人である。又其の才學が認められて家康以下徳川四代の將軍に歴仕し、自ら祝髮して道春と名乗つてゐる所を見ると、當時の儒者が剃髮僧形をして利外の徒と目せられた風習を彼も亦襲つたものと思はれる。

儒者が蓄髮し士分の取扱を公認されたのは元祿四年以後のことで、羅山の孫、鳳岡が將軍綱吉の時に大學頭に任ぜられ、從五位下に叙せられたのが最初である。保元以降久しく文藝が僧侶の手に屬して儒者として獨立した階級が、舊來の家柄以外には認められなかつたから凡て僧形薙髮してゐたものである。それが此の時から内容外形共に獨立した姿になつたのである。

又羅山は陸象山や王陽明、老莊を排撃すると同時に、佛教が非常に嫌で「禪徒に告ぐる文」の如き

極端な形式論にまで及んでゐるものがあるとするれば、自ら祝髮僧形を摸することを恥ぢねばならぬ筈である。虎關を目して儒者の言を借りて佛氏の説を文る者と言ふならば、彼自らは佛家の形を借りて儒者の言を擬するものと言つて宜いかと思はれる。門戸の見も甚しいと言はねばならぬ。

羅山は更に論じて

昔楊子雲は易に擬して太玄を作り、論語に擬して法言を作る。夫れ子雲は醇儒なり。然れども識者猶ほ之を難んず。彼れ鍊や何する者ぞ。猥りに易、春秋に效ふや。僭上の罪、連に處らず。子雲すら尙此の如し。而るを況んや彼をや。誠に天下をして其の書を有する者をして舉げて之を焚かしむれば則ち其の罪、將に少しく赦さるるあらんとす(原漢文)と。何といふ暴論であらう。

一體こゝに羅山が擧げた後漢の楊雄が、聖人の書として尊重せられた易經に模擬して太玄經を著し、論語に做似して法言を作つたといふことに關しては夙に儒者の間に非難がある。然しそれは楊雄なる人物が所謂曲學阿世的な所行があつたとするからの事である。楊雄は漢室を篡つて新といふ僞國を建てた王莽に仕へ之に媚びて、「劇秦美新」といふ賦を製作し、正直の臣を害し己の害に遭ふことを恐れたといふ、その節操を疑はれる様な文學者であつたからである。この楊雄を羅山が醇儒と稱してゐることすら大變な見當違ひであるにも係らず吾虎關の如き、畏くも 龜山、後伏見、

後醍醐、光明、後村上天皇の御知遇に浴し法問を忝うしたのみならず、特に建武中興の御偉業を翼賛し奉り、陰に陽に忠君愛國の誠を致し、大義名分の理を明にすべく是れ力めた聖僧の述作に向つて、之を焚かば少しくその罪を赦されるであらうなどの辟説を臆面もなく言ひ放つてゐるのは沙汰の限りであらうと思ふ。況んやまた、彼は自ら神武天皇論(文集卷廿五所收)をものした中に、我が國の三種の神器は天成に出で、自然に本づくことを説いてゐるのであるが、之は夙に吾虎關が元亨釋書の王臣篇で詳論し國體の尊嚴を強調してゐるのと全く同調であるに於て、その思想的な繼承を如何に辨するのであらうか。吾人はこゝに至つて羅山その人の健忘を疑ひたくなるのである。

羅山から凡そ六七十年後に出た尾張八事山の諦忍妙龍(寶永二年、二三六五生、天明六年、二四四六歿)は眞言宗の人であるが相當に博い學識を有し、空華隨筆といふ漢文二卷の著述を遺してゐる。この中にも亦元亨釋書に就いて評論をした一章がある。こゝに先づ諦忍の所論を紹介するならば、大體次の様に見てゐる。

虎關の元亨釋書では、東福聖一の傳は全く一軸に滿つる程の詳述であるに係らず、永平の道元の傳は纔に五行に過ぎない。是は何の意であらうか。虎關は道元の教化は北陸地方丈に播かつても中土には及ばなかつたのは遺憾であると言つてゐるが、然らば六祖の化は嶺南に及んではゐるが中土には擴がらなかつたのを遺憾とせねばならぬではないか。思はざるの甚しいものがある。一體慧能が嶺南に韜昧したのは黃梅弘忍の指授に依つたのである。道元が北越に潜伏したのは天童の如淨の

囑託を欽んだからである。是等は皆列祖の芳躅であつて後昆を憂ふるに意があつた爲である。大凡源深きものは流必ず遠く、厚く藏するものは香ますく甚しく、根牢きものは枝必ず繁きものである。今日慧能の雲仍（末孫の意）が天下に碁布し、道元の兒孫が宇内に充塞してゐるのは嶺南、北越に輻光した餘輝で無いと言へようか。古人も「大音は希聲」といひ、「良賈は深く藏して虚しきが如し」と言つてゐるではないか。虎關師は何で之を知らないのであらう。諸宗志の中に、北地も亦新豊の微派があると述べてゐるのは、濟門の痛快に誇つて、洞上の綿密を蔑にするに肖てゐる、圓悟禪師は、「佛法本より彼此なし、總て是六祖下の兒孫」と曰つてゐる。然らば同門は互に相愛護稱讚すべきである。何故に貶して微派など言ふのであるか。其の微派は纔に以て觴を濫ぶ程でも、他日舫舟を以てせざれば涉ることの出来ないものゝあるのを知らない様である。予は亦「佛法本より彼此なし、總に釋迦の兒孫」と謂ひたいのである。然らば乃ち何の間然する所があらうか。しかのみならず、僧史は宗乘の優降を論ずる書ではないのであつて惟々泛く五家七宗講律諸徳の高縦を記して以て天下後世に示せばよろしい。梁唐宋の僧傳は皆さうである。故に予を以て見れば、虎關は僧史の大體を審にせないものゝ様である。唐の劉子玄は、史には三長がある。才と學と識とであるが、世に之を兼ね有するものは罕であると言つてゐる。虎關の如き人は才と學には頗る富んでゐるが識見が淺陋であつて佛海に風波を涌し、同門に胡越を生ずるに至るものである。痛むべき

の甚しいものと言はねばならぬ。(空華隨筆一卷之上、道元禪師の條、原漢文)

諦忍は大體かう言つた風な文章を以て虎關の史觀を難じてゐるのである。曹洞宗の開祖道元禪師の傳記が餘りに簡短すぎるといふ事を問題とし、之が同門に胡越を生ずるとまで杞憂してゐるのである。

成る程元亨釋書卷六淨禪の部に在る道元の傳は簡明である。然し之を虚心坦懷に讀むならば別に作者の偏見らしいものは見出し得ない。誠に要を得た文としか見られない。其の贊辭も、諦忍の言ふ如く、「元の化北地に播いて中土に及ばず、遺意無きこと能はず」(原漢文)といふ十六字に過ぎぬが、虎關は寧ろ當時の實狀から推して道元に深く同情を寄せたものと解することが至當であると思ふ。道元が聚落の生活を捨て、永平寺に山居したのは、その實慶記にある如く、

「汝はこれ後生なりと雖も、頗る古貌あり。直に須らく深山幽谷に居して、佛祖の聖胎を長養すべし。必らず古徳の證處に至らん」

との師如淨の垂訓を遵奉したのであつて、「永平の弊制は、道路深遠にして閑人到らず、貧婁寒寂にして學雲留め難し」(永平廣錄)といふ風な中に禪居した事實を虎關はそのまゝに傳へたまで、少しも之に門戸の見を挿んでゐるのではない。又卷二十七の諸宗志で禪を論じた終に、本邦の禪宗に及び、「建久の間、建仁の西公單傳全提す。寬實に逮んで爾隆の二師東西に鼓行す。此方殿れて傳ふ

遲暮を恨むと雖も百數十歲鬱として強宗と爲る。西は積翠の裔也。爾隆は揚岐の胤なり。北地に亦新豐の微派あり。天下の禪を曰ふもの三家なり」(原漢文と書いてゐるのも、ことさらに永平禪を見くびつた譯では無い。といふのは道元の寂後五六十年後の虎關の時代はまだまだ、その祇管打坐の道は後世の如くに弘くは行き涉つてゐなかつたものと思はれるからである。「良賈は深く藏して虚しきが如し」といふが如きことは自ら別問題である。諦忍は僧史は宗乘の優劣を論すべきものではないとも言つてゐるが、虎關は道元に關する限り其の宗風の優劣などには論及してはゐないのである。然しそれは別として何も僧史だからとして古人の行履のみを後世に示すべきもので、議論に涉つてはならぬといふ道理は毛頭ないと思ふ。史贊があり評傳があつてこそ史家の價値が見はれるのである。單なる事實の記載抄録にのみ留まらねばならぬ筈はない。此の意味に於て虎關の元亨釋書は梁や唐や梁の高僧傳の範疇から脱してゐるのであつて、又そこに虎關の史觀が覗へるのである。虎關に才と學を許して置き乍ら識見を認めずとする諦忍の論には俄に肯づきかねるものがある。況んや其の自ら「予不似なりと雖も、既に釋尊遺法の弟子たり。禪海教海同一鹹味濟上洞上同一兄弟の看を作して更に二相を見ず。是を以て法中の一魔事を聞いては、猶ほ萬箭の胸に擯るが如し」と述ぶるに至つては、ちと苦勞性が勝ち過ぎてゐるはしないであらうか。

本朝高僧傳の著者師蠻元は虎關を贊して、「吾國山川の倬詭、物産の魁殊、金銀銅鏡の外、珍

奇衆夥なるも而も吾の歎美する所に非るなり。夫れ山に富士あり。僧に鍊公ある、是れ吾の瞻仰する所なり」といひ、又「凡そ佛法東漸して已來、集大成する者、鍊公より盛なるは無し」(本朝高僧傳卷廿七) (原漢文)と激稱してゐるのであるが、然し元亨釋書卷三の神護寺の眞濟(弘法大師十大弟子の首)の傳後に贊して、「世に言ふ、眞濟は色に惑うて魅となると。彼の不平亡聊の時に當つて靡曼を偷眼し守る所を失つて伺はるゝこと有りしか云々」と論じ、眞濟は文徳天皇の二皇子が皇位繼承の問題の起つた際に法力を叡山の慧亮と戦はして負けたといふ不平もあつて、文徳天皇御登遐の後隱居したといふ風な記事に就いて、師蠻は虎關の釋書に流言を採つて贊辭に系けたことは憾むべきことであるのみならず。慧亮と驗を抗して勝たなかつたといふことも取る所の無いことである。菩薩羅漢は既に微細の惑を斷じてゐる。況んや色欲をや。初より咎を聖門に得たものは無いのである。今八百年の後に此論を作つて濟公の爲に其の塵を雪くものである(本朝高僧傳卷六、原漢文)と評してゐるのは或は正當であるかも知れぬ。

然し釋書卷五の高野山明遍の行事に關して師蠻は大いに虎關と見を異にし「濟北師の論じて之を譏する、余敢て命を聞かず」(本朝高僧傳卷十三、原漢文)と言つてゐるのに對しては吾人遽に師蠻に贊成し難いものがある。今その大要を舉げて見ればかうである。釋明遍は彼の平治の亂で死した藤原通憲の季子であつて、早くから高野山に上つて三十年間も山を下らなかつた人である。その兄弟には靜賢、澄

憲、勝覺、覺憲などいふ高僧があつたが、亡父通憲の十三回忌を修するに當つてこれ等の諸子は明遍を都に迎へて散導師にしようとした。が明遍は之を謝していふに「我は已に世を逃れて此の山に隱約してゐる。追孝といふと雖も出づるに堪へぬ」と。更に使者を以て歸ることを促したけれ共、彼は「我は孝を忘れたのではない。只諸兄の隊に入ることを怕るゝのである。何となれば、世を遯るゝものは、吾も世を棄て、世も我を棄てゝゐるのである。衆人と齒せぬのが遯の全きものである。然るに世が我を棄てゝ、我が世を棄てぬのは乞食である。我が世を棄て、世が我を棄てないのは今の諸名徳である。この二は眞遯とは申されない。諸兄はみな南北二都の高徳である。我其の間に交つて薄技をいたし、狐鳴に慣つたならば隱約の素を失ふことになる。又朝廷で吾の出づることを聞かれて、我を召さば我辭するの地が無いことになる。我は孝恩を忘れてゐるのではないのである」と言つて慧智といふ友人を代理として父の法要に臨ませたので都下では之を眞遯の美談として相傳へたといふのである。虎關は之に就いて論じて曰ふ「甚しいかな、士の道を聞かざるや。苟も道を聞かば、明遍も斯の言を發せじ。諸兄も亦服せじ。世また美談と爲さざらん。三者は道を聞かざるの愆なり」とし、明遍や其の諸兄は皆僧である。僧は世を逃れた士である。世を逃れる所の標は、頭を禿にし、服を緇にし、寺院に住するのである。それで世間では其の儀相を貴んで福田とし、之に歸敬し、王公も僧官や卦戸を與へる、これが福田である。この際、我が徒は法を以て相交はつて

心を移さ無い筈である。然るに澆漓の世となつてはこの渥遇を受け乍ら、身の緇髡を忘れて搢紳と比並し、覬覦苟容して尾を搖がし憐みを乞ふといふ醜態である。吾道衰へたる尙ひきしといはねばならぬ。こゝに緇侶として遯るゝといふことがある譯である。明遍か愚人ならば誅むるの要はない。が已に高譽を稟けてゐる人である。然るに何故凡僧に例してたやすく遁の言を發したのであらうか。父母は天である。孝子の親に於ける關係は水火よりも甚しい。明遍が僧でなくて許由の様な隱者であつたにせよ此の時に於ては一たび山を出でざるを得ない筈である。況んや我が佛徒なるに於てをやである。我が佛教では先づ孝を立てる。經文にも「孝順父母」といふことがある。我が門の偉い人で父母の在す時は逃逸して命に迂ふものもある。然し追修を拒むものは聞かない。明遍は何が爲に始めて大逆を聞くのであらうか。恐らく名に絆がれて道に暗かつたのであらう。明遍か諸兄の請に應じて山を出て追薦すればまだしもであるか、高名を釣り孝道に怠つて却つて語を造して、朝廷我を召さば辭するの地なしなど言つたことは、皆名を賣るの言である。一體事には公と私とがある。父の追修に赴くのは私事である。何故に公に假りて朝廷に矯るのであらうか。明遍は極めて理に味いものと言はねばならぬ。蓋し彼は道を以て標とせずして、遯といふことを標としてゐる。故に其の父に標するに遯を以てし、其の君に標するにも遯を以てし、其の兄に標するにも遯を以てし、其の世人に標するにも遯といふことを以てしてゐる。彼は遯の爲に覆はれて終に道を聞かなかつたの

である。夫れ眞の隱遯といふことは遯といふ念をも共に忘れることである。若し遯といふことを心に懷いてゐるならば、利といふ事が心に在るのと同じである。一遯は利である。隱人は遯の爲に溺れるのである。恰度世人が利の爲に溺るゝ様なものである。溺るゝといふ點に於ては利と遯と同じである。又人の心は移る所があれば必ず忘れるものである。天を思ふと地を忘れる。東を思ふと西を忘れる。明遍は遯を思うて孝を忘れたのである。之を忘れずといふのは妄信である。世人には造くつて忘れるものと、知らずして忘れるものとあるが、明遍の場合は知らずして忘れたのである。人の子として孝思は須臾も離る可らざるものである。況んや忘るゝに於てをやである。其の間に遠近を言ふべきものではないのである。又思ひにも厚と薄とがある。思の薄いのは忘れるの萌芽である。今明遍は心を遯に移して孝に薄かつたのである。忘に漸せざるを得ぬ譯である。君子は微を防ぐものである。明遍は之を知らずして忘れずといふのは之を知らざるの妄である。今日民間にも道に悖るものは、親の喪に遭うては痛哭深慟するが一朝にして息めてしまふ。これは近くしては厚いが遠くしては薄いからである。君子は終身忘れないのである。若し忘れるといふことがあらば罔極といふ譯には行かぬ。又明遍は父の年忌を筭へて自ら山を下り、諸兄と法要を行じて普通である。然るに招請を受け乍ら出ることせせず、重ねて不遜の詞を造つて諸兄を誣ひ、世人を惑はしたといふことは明遍の爲に恕する譯には行はぬ。故に明遍の場合は道を聞かざるの愆であると思ふのであ

ると、以上が釋書に於て虎關が明遍の不孝を論難した理由である。かういふ考も亦虎關が平生から尊敬してゐた明教大師契嵩の孝の思想から大いに影響されてゐるのだらうと思はれるのであるが、之に就いて師蠻は「釋子には禪悅の食、法身の香がある。故に高貴の家に比し大講會を用ふるの要はないのである。明遍の法は洪廣であり、操守は完全である。そこに孝忌は具つてゐる。これが眞修の人と謂ふべきである」と辨じてゐるのである。師蠻には師蠻としての見識があるにはあるが、如何に釋氏といへども禮としての孝道を無視する譯には行かぬと思はれる。虎關の明遍に對する論鋒はかなり激越ではあるが、勿論これを頭から否定することも早計であるし、又その中に大いに味ふべきものゝあることを忘れてはならぬと思ふ。

凡そ何人の著作にせよ議論にしろ、後世から批判を下すと色々に言ふことが出来るのである。虎關の場合にしてもそれが一々完全無瑕のものとはばかりは申されまい。まして元亨釋書のような日本の佛教史僧傳の皮切りを試みたものに向つてそれぞれ微細に専門的に粗探しをやつた日には幾らでも言ひ分は出て來ることであらう。單にこの元亨釋書だけに就て見ても虎關があれ丈の浩瀚なものを著作したには十六年の歳月を閲して多くの史料を蒐蒐し讀破したことであらうが一つも其の典據を出されなかつたことは、今日から見て遺憾と言へば遺憾である。之に就て先年龍谷學報に吾が畏敬する禿氏教授が「元亨釋書の素材と法華驗記」(昭和十五年三月)で述べられてゐることは大い

に前述の私評とは趣を異にしてゐて特に敬意を表すべきものである。然し又中岩圓月が虎關に贈つた書に、

間に居して細に元亨釋書を読み、多く獲る所あり。心目朗然忻慰無量なり。素より本朝諸名僧の行實及び其の所由の未だ嘗て見聞せざるを以ての故に意を此に注ぐ。先づ其の傳并に年表を取つて之を披閱し、然して贊論志等の文を讀むに至つて所得更に多く、素望の外に出で幸甚し。實に是れ國朝の至寶なり。豈翅々吾釋家席上の珍たる可きのみならんや。孔子の十翼は美を周易に擅にするも、今の度摠論は多くは讓る可らざるなり。班固九流光を藝文に垂るゝも、今の諸宗志は當に加ふる所あるべきなり。其の諸の贊詞は則ち玉轉珠回、議論精密、實に洪覺範、瑋石室の能く詣るべきに非るなり。十波羅蜜を以て、支して之を十傳に配するに至つては則ち道宣、贊寧の輩史才に於ては末なりとの論も亦達せり。惜しいかな吾國好事の者にして斯の如きの文、廣く流布するを見ざるや。(原漢文)

と書いてゐるのも、あながち我田引水、最眞の引き倒しと言ふ譯ではないと思ふ。虎關は性來病弱な人であつた。常に藥餌に親しみつゝも六十九年の世壽を保ち、著作に演法に家國天下の道標となり、老の將に至らむとするを知らなかつた底の神氣の絶倫さ、用意の周到さ、吾人はその遺文を閲し靈蹤を追うて以て深く欽仰し、更に一二論者の妄辨に接して爲に浩歎之を久うせざるを得ないのである。(昭和一七、六、一五稿)